

「正信念仏偈」に学ぶ【第六回】

Ⅱ 「総讚」のころ

大谷大学名誉教授・第19組聖光寺前任職

鍵主 良敬

text by Ryohei Kaginushi

六、南無阿弥陀仏ハ法蔵魂ゾ

量深

1、よく有無の見を摧破せん

龍樹和讚に述べられる「有無の邪見を破すべしと 世尊はかねてときたまう」（聖典四八九頁）は「讚阿弥陀仏偈和讚」の「解脱の光輪きわもなし……有無をはなるとのべたまう」（聖典四七九頁）に通じています。「無明の闇」といわれる暗い世界から解放されることによって、有の見と無の見を粉碎できるのです。ほんとうの断・捨・離による解放といえます。

私たちは必要と思われるものが無いことによって悩むことがよくあります。では有ればいいのでしょうか。そうともいえません。有もまた悩みの種子になります。

ですから「大経」には「田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。（中略）田なければまた憂えて田あらんと欲う。宅なければまた憂えて宅あらんと欲う」（聖典五八頁）とあります。ここでの「田」は財産のことであり、「宅」は家庭です。要するに私たちは有っても無くても困るのです。その困惑の理由を見つけて巧みに対応できないか。そのことが可能となる慧眼に出遇ったのが聖人なのです。

曾我先生は言います。「心が寂静であるためには、執着を離れねばならぬ。執着があれば、常に心が騒がしい。一人おれば淋しい。大勢おれば騒がしい。心が寂静であれば、一人おれば静かである。大勢おれば賑やかである。こういうのは、その心が寂静であるからである。大勢おれば、うるさい、やかましい。一人おれば淋しくて、がまんできない。それは、自分の心が濁っておるからである」（『正信偈聴記』二八頁）と。

心が濁っているかぎり、どちらも駄目なのです。その心を転換するしかありません。そうすればどちらでも充たされます。その転ずるはたらきの主体を「法蔵魂」といわれていると思いました。

2、機の深信は絶望ではありません

曾我先生は、「自然法爾の、ほんとうの主体性は、南無阿弥陀仏なんでしょう。南無阿弥陀仏とは、信心なんでしょう。真実信心が、自分自身、その体、南無阿弥陀仏」（『同前』四四頁）といます。

わかりにくい文章だと最初は思ったのですが、常識的な虚妄の理知によって見ていたからでした。ほんとうの主体としての自分自身とはどの私なのか。通常で私・自分・己れなどという場合、私たちは自分について何も考えていないことに気づかされました。その自分を問い直す必要があるのです。そこから「真」の「宗」の歩みが始まるからです。

ともあれ真実の信心が自分自身であり、その体が南無阿弥陀仏であるというのは、一筋縄ではいかない難問なのですが、その謎を解く手がかりは身近なところにありました。

曾我先生は次のように言います。「絶望だと言うかもしらんけれども、これは絶望でもない」と。なぜなら「機の深信」が「法の深信を呼び起こす」のであって、絶望でしかないというなら「法の深信は出て来ないですよ。絶望したのに、法の深信があるわけではない」（『同前』四五頁）と。

3、大悲の尊号と憶念の心

最後に「正像末和讃」の「弥陀の尊号となえつつ信樂まことにうるひとは 憶念の心つねにして仏恩報ずるおもいあり」について述べます。「信樂まことにうるひと」とは、徹底的に自分の罪業深重を思い知らされた「ひと」のことでしょう。聖人御自身のことをおっしゃられたのだと思います。深刻な告白です。それが「機の深信」であるなら、疑いようのない自分の事実を認めたことになります。

自分の背中では自分では見えません。それなのに自分が見えたとすれば、背後から私の惨憺たる事実を照らし出している光明があることになります。それが「法の深信」です。その光明が無碍光如来の光なので「南無阿弥陀仏」の無辺光になるのです。

機と法は異なる面はありますが、分けることはできません。助かりようのない私と、その私を助ける法蔵菩薩との関係も同じです。違うところもありますが、根源は一つです。

「憶念は、信心をえたるひとは、うたがいなきゆえに、本願をつねにおもいずるころのたえぬをいうなり」（『唯信鈔文意』聖典五五一頁）と聖人はいいます。憶念の心は私たちにはありません。それなのにその「たえぬ」「ころ」が深いところから湧いてくるとすれば、それはまさに他力の本願力より賜った「つねにおもいずるころ」になります。大悲の願心との出遇いが、完全に成就しているといえるでしょう。